

【氏名】 小松原 秀信

【所属大学院】(助成決定時)

立教大学大学院 文学研究科 地理学専攻

【研究題目】

現代インド社会におけるオカルト的想像力と儀礼

— 村落部の呪医による治癒儀礼と都市居住者の訪村行為に注目して —

【研究の目的】

大きく変貌を遂げる現代インド社会において、人々の間で邪術・悪霊などのオカルト的想像力がリバイバルしている。こうした傾向は、都市居住者の場合にも顕著である。都市居住者は積極的にオカルトの存在を肯定しているわけではない。しかし実際には、都市部から村落へ邪術・悪霊おとしにくる人々が年々増加している。本研究では、北インド、ウッタル・プラデーシュ州ワラーナシー県の村落(B 村)における呪医の治癒儀礼と都市居住者による邪術・悪霊おとしのための訪村行為に注目することによって、都市居住者の場所感覚(=主観的空間編成)と彼らのオカルト的想像力・儀礼実践との関係について、文化人類学的視座から明らかにすることを目的としている。

【研究の内容・方法】

B 村に、「アゴール・バーバー」と称する 60 歳代の呪医(以後、バーバー)が住んでいる。彼のもとへは多くの患者が治病や除災のために訪れている。本研究では、151 人(組)の患者に聞き取り調査を行い、またバーバーの治癒儀礼および交渉の過程についての参与観察を行った。

患者はとくに、厄払いに最適な日とされる日曜日と火曜日にバーバーのもとを訪れる。その中でも近郊都市ワラーナシーやアラハバードの都市居住者の来訪が年々増加している。多くの場合には、バーバーによって治病や除災に成功した経験者が次の患者を呼び込んでくる。バーバーも、患者が新たな患者を連れてくることを期待していることもあり、そのネットワークは徐々に拡大している。バーバーによって宣告される災因は、患者の親族や隣人、ビジネスの競合相手によって仕掛けられた邪術や悪霊であるが、実際にはバーバーを訪れる以前から、患者はオカルト的災因をある程度想定している。たとえば多くの患者は、まず西欧医学的な治療を試みた後にバーバーの下を訪れている。インドの西欧医学の水準は高く、人々間での西欧医学への信頼は絶大であるためである。しかし、その治療が思うような効果を挙げないとき、患者はオカルト的災因の可能性を疑い、バーバーの噂を聞いた者が患者となって彼のもとへ来る。

ただし、都市部の患者が積極的にオカルトの存在を肯定しているわけではない。むしろ彼らは一般に、自分たちが高等教育を受けて都市生活をしていることを誇りにもしているため、邪術や悪霊などは村落に住む「田舎者」だけの関心事であると語る。しかし実際には、こうした認識が彼

らを村へと向かわせている。というのも、彼らは、ひとたび邪術や悪霊に苛まれることがあれば、それをおとすには日頃から邪術・悪霊おとしに携わっている村落部の呪医による治療が効果的であるという認識も同時に有しているからである。つまり、都市居住者による邪術・悪霊おとしのための訪村行為には、彼ら自身の村落に対するイメージが影響を与えている。

#### 【結論・考察】

都市と村落はヒト、モノ、カネ、情報などの移動を通じて密接に結びついており、その境界は明確に線引きできるようなものではない。しかしその一方で、人々の間では「都市と村落」に対するある種のイメージや場所感覚が保持されているということも事実である。ここで言う場所感覚とは、人々の身体性に根ざした、自身の生活の場としての「こちら」と「わからなさ」が付随する場としての「あちら」というような、主観的空間編成を指す。主観的空間編成は、行政的・地理的な空間区分、あるいは建築物などの物質的な諸要素から影響を受けながらも、むしろ、個々人の生活世界での社会的行為や関係性を通じて不断に産出され続ける想像力によって成立している。主観的空間編成においてその中心となるのは常にその想像力の主体である。都市居住者の「邪術や悪霊などは『田舎者』の関心事である」という言説は、その主体の生活の場であるホームとしての都市と、主体の生活の場から離れた、ある種の「わからなさ」が伴うアウェイとしての村落社会という主観的空間編成を基に生み出された、彼ら自身の想像力の発露といえる。